

マルキシズムとモダニズム

三派鼎立(平野謙)

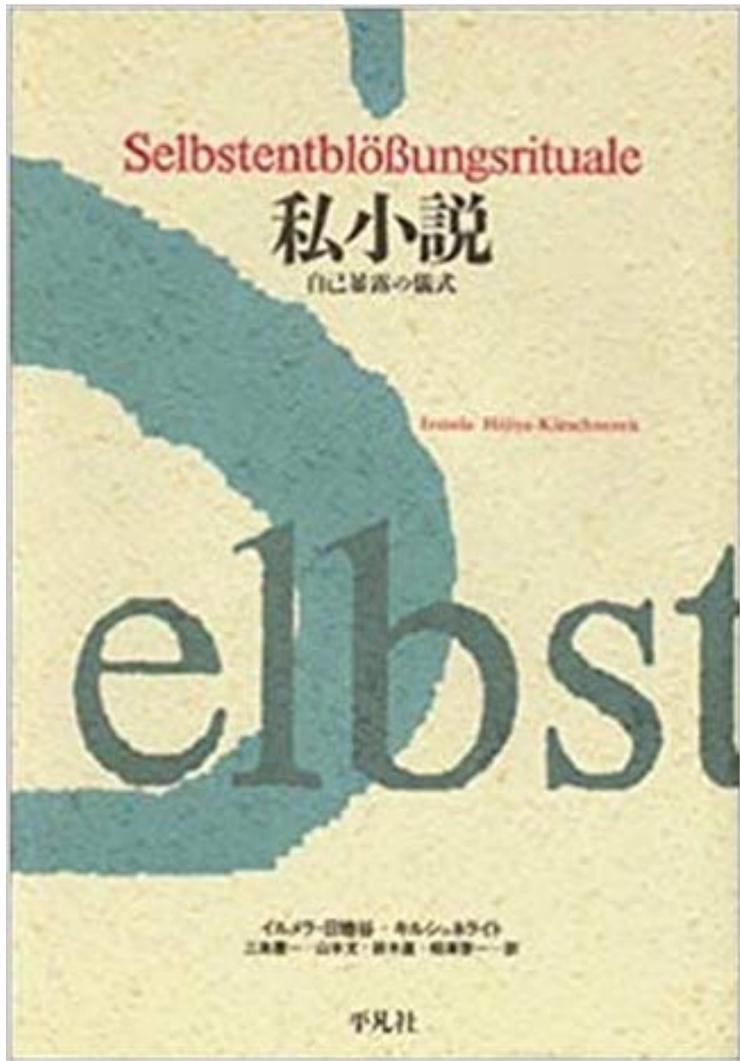
既成文壇
心境小説

プロレタリア
文学

モダニズム
文学

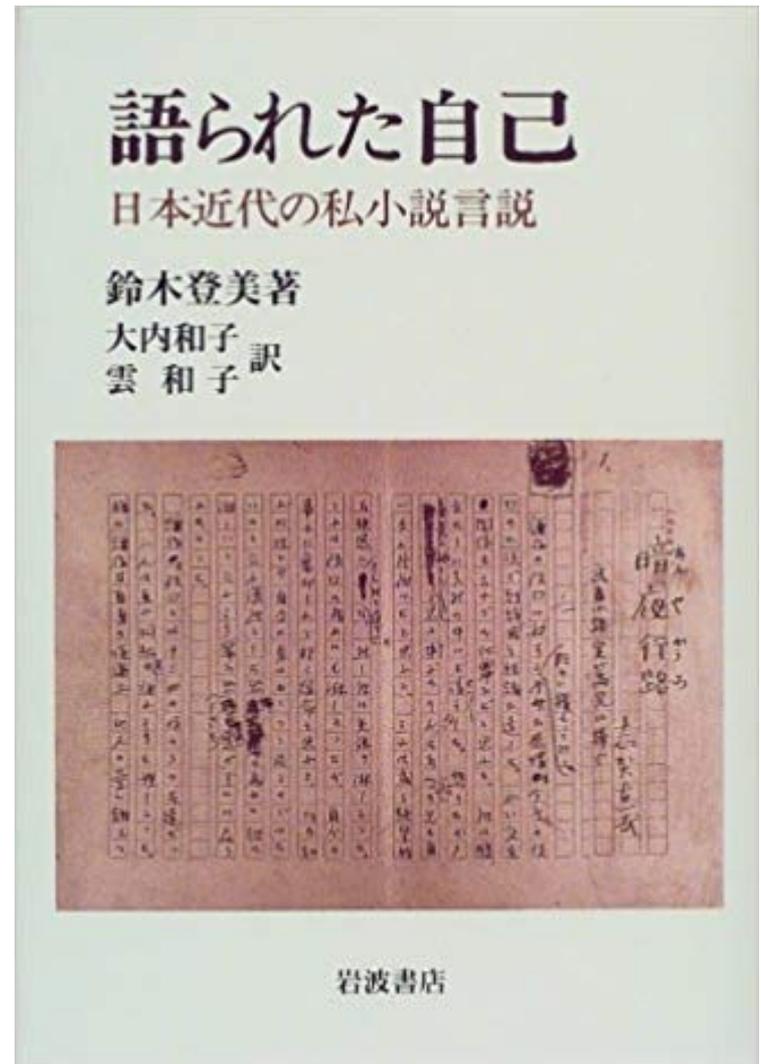
【既成文壇】

- 中村武羅夫「本格小説と心境小説と」『新小説』1924.1
他人のことの書けない作家、若しくは書こうとしない作家、自分のことよりほかには書かない作家、若しくは書こうとしない作家の作品は、その度合いちがいこそあれ、大抵は心境小説であると言って好い。
- 久米正雄「私小説と心境小説」文芸講座、1925.1
それはイヒ・ロマーンの訳でなくて、寧ろ、別な「自叙」小説とも云うべきものである。一言にして言えば、作家が自分を、最も直截にさらけ出した小説、と云う程の意味である。



イルメラ 日地谷・キルシュネライト,1992

平凡社



鈴木登美、2000 岩波書店

「ひとつの読みのモード」「どんなテキストも、このモードで読まれれば、私小説になりうる」

三派鼎立(平野謙)

既成文壇
心境小説

プロレタリア
文学

モダニズム
文学

「大衆」文学

論争の時代



平野謙, 小田切秀雄, 山本健吉 編

未来社, 2006

論争の時代

- 「宣言一つ」をめぐる論争
- 内容的価値論争
- 散文藝術論争
- 私小説論争
- 「小説の筋」論争
- 既成文壇の内部論争
- 新感覚派・既成文壇論争
- 批評方法に関する論争
- 目的意識論争
- 藝術大衆化論争
- 形式主義文學論争
- 藝術的価値論争
- 新興藝術派・プロレタリア文學論争
- 政治と文學論争
- 社会主義リアリズム論争
- 行動主義文學論争
- 転向論争
- 日本浪漫派論争
- シェストフ論争
- 純粹小説論争
- 思想と実生活論争
- 中野重治・小林秀雄論争
- 素材派・藝術派論争
- 文學非力説論争
- 国民文學論争

有島武郎「宣言一つ」『改造』1922.1

- 私は第四階級以外の階級に生まれ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対しては無縁の衆生の一人である。私は新興階級者になることが絶対に出来ないから、ならして貰おうとは思わない。第四階級のために弁解し、立論し、運動する、そんなばかげきった虚偽もできない。今後私の生活がいかように変わろうとも、私は結局在来の支配階級者の所産であるに相違ないことは、黒人種がいくら石鹼で洗い立てられても、黒人種たるを失わないのと同様であるだろう。したがって私の仕事は第四階級者以外の人々に訴える仕事として始終するほかはあるまい。

「有島武郎氏の窮屈な考え方」 『改造』1922.1

広津和郎

「有島武郎氏の窮屈な考え方」

(笑いながら)前にも云った通り、文学はブルジョアにもプロレタリアにも専属すべきものでないと云うのが僕の意見なのです。……有島氏のあの説は、ブルジョアとプロレタリアと云う二つの言葉に、余りに脅かされ過ぎてはいないかと思うのです。

今夜、僕がどのように変革を望むか、支配階級者の所産であるから石鹼で洗い立てられておられる様であるだろう。したがって、僕が人々に訴える仕事として

生まれ、育ち、教育を受け、そしては無縁の衆生の一人であることが絶対に出来ないから、第四階級のために弁解し、ばかげきことを言わない。

堺利彦

「有島武郎氏の絶望の宣言」

知識階級の一部が労働運動に加わることは必然であり、また必要である。……有島氏の『宣言』は、つまり温良なる人道主義者が絶望的逃避を試みた宣言に過ぎない。

1928(昭和3)

1927(昭和2)

1926(大正15・昭和元)

1925(大正14)

1924(大正13)

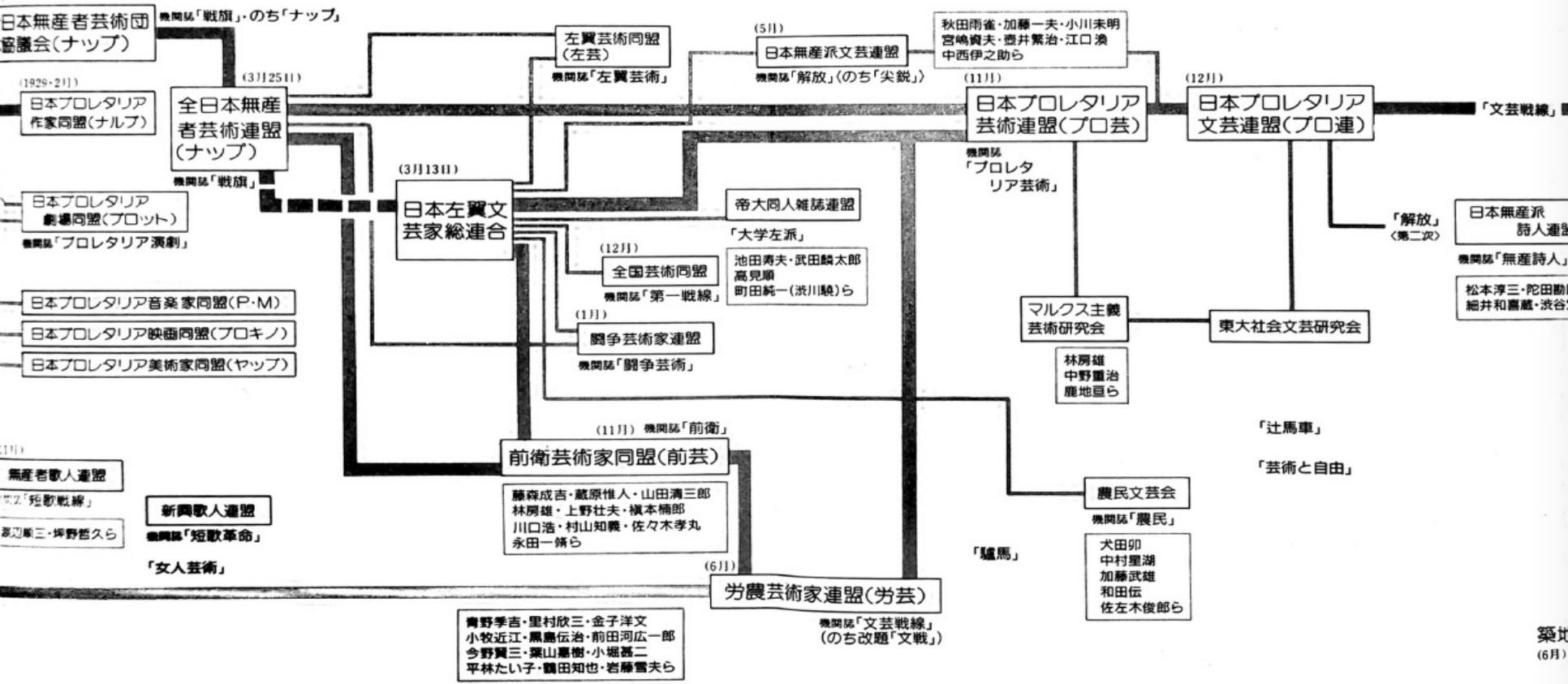
●治安維持法、緊急勅令により最高刑を死刑に改悪(6月)

●第1回普通選挙(2月)
●3・15事件

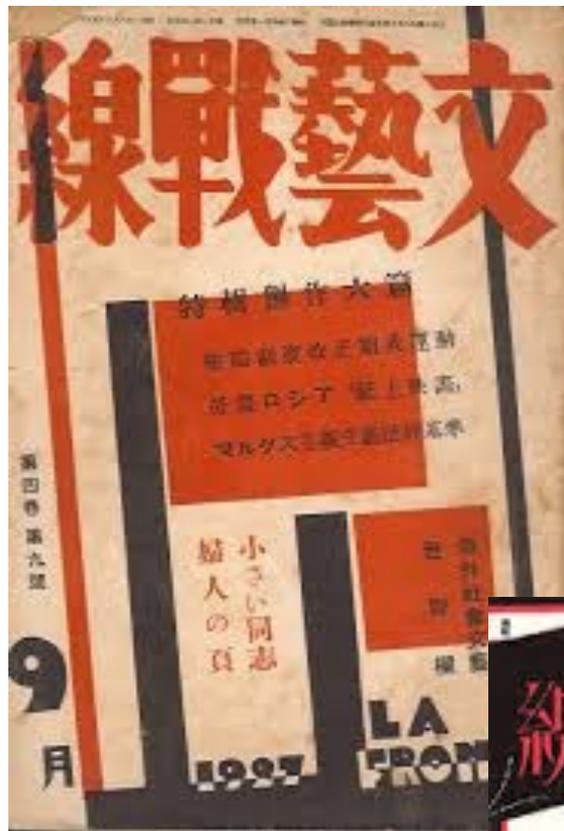
●芥川龍之介自殺(7月)
●日本共産党27年テーゼ決定(7月)

●金融恐慌(3月)

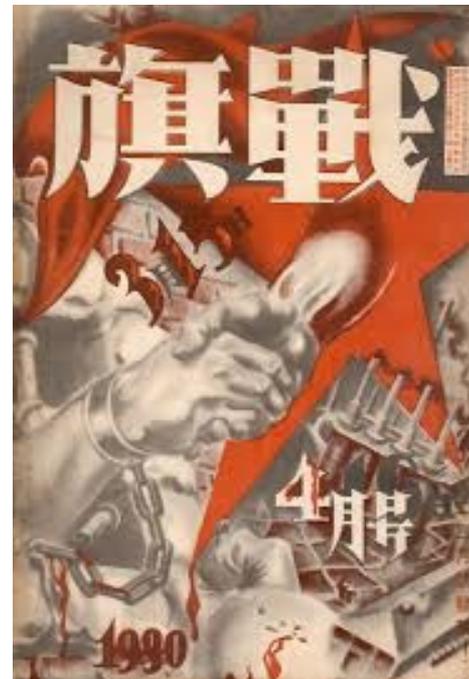
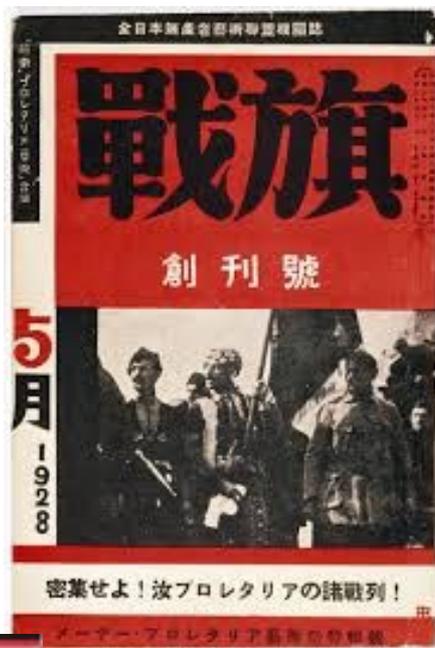
●治安維持法公布(4月)



プロレタリア文学



文芸戦線 1924.6-1934



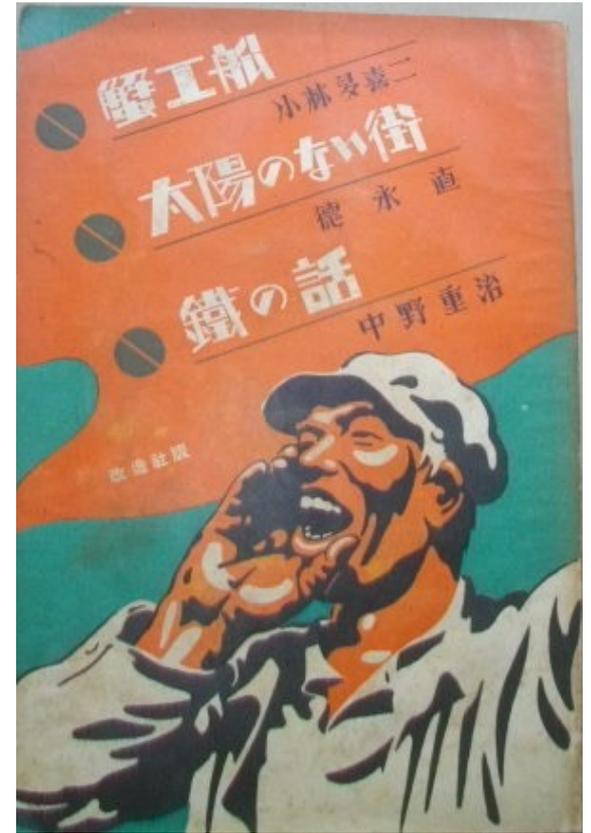
戦旗
1928.5-
1931.12



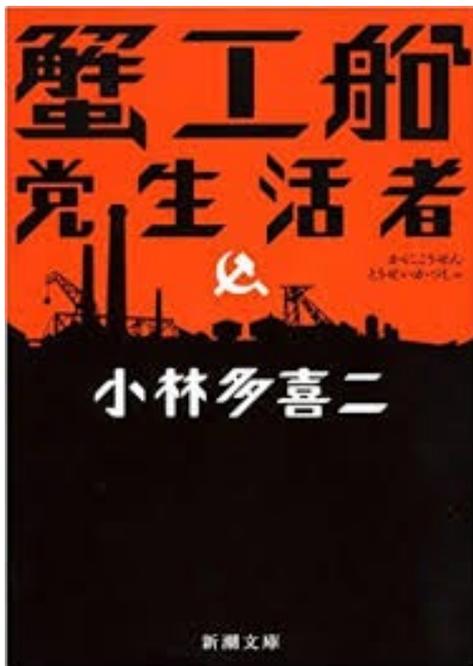
1926



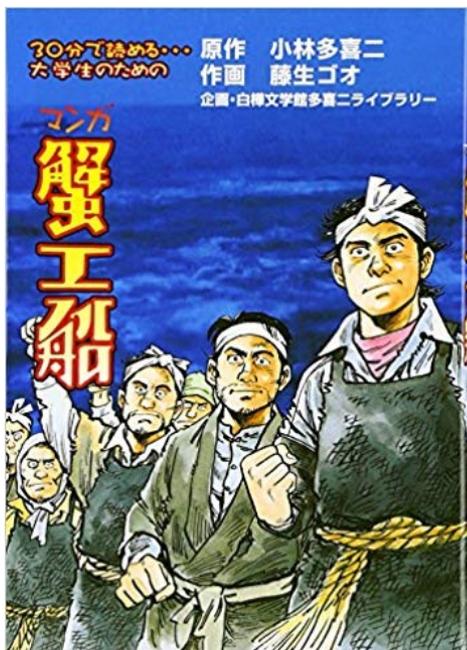
1929



1931



新潮文庫, 1953



東銀座出版社, 2006



1953 監督:山村聡

製作: 現代ぷろだくしょん



2009 監督: SABU

配給: IMJエンタテインメント



原恵一郎

新潮社「週刊コミックパンチ」, 2008

2006
藤生ゴオ

「党生活者」『中央公論』1933.4-5

母は帰りがけに、自分は今六十だが八十まで、これから二十年生きる心積りだ、が今六十だから明日にも死ぬことがあるかも知れない、が死んだということが分れば矢張りひよっとお前が自家へ来ないとも限らない、そうすれば危いから死んだということは知らせないことにしたよ、と云った。死目に遇うとか遇わぬとかいうことは、世の普通の人にとってはこれ以上の大きな問題はないかも知れぬ。しかも六十の母親にとっては。母がこれだけのことを決心してくれたことには、私は身が引きしまるような激動を感じた。私は黙っていた。黙っていることしか出来なかった。

外へ出ると、母は私の後から、もう独りで帰れるからお前は用心をして戻ってくれと云った。それから、急に心配な声で、

「どうもお前の肩にくせがある……」

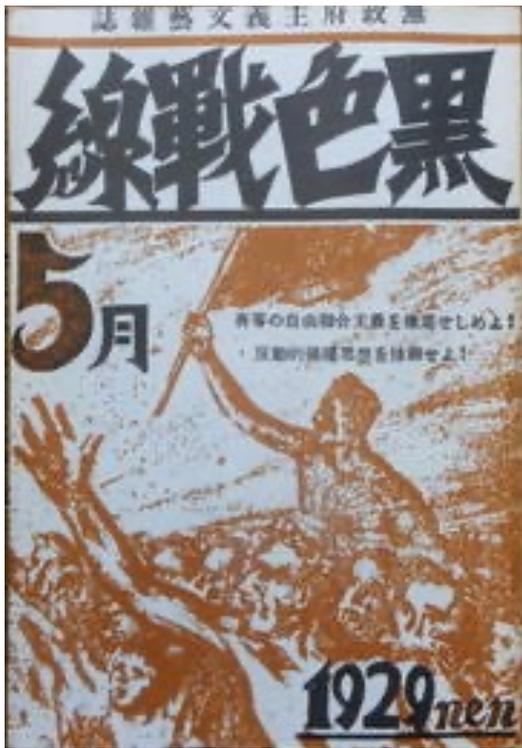
と云った。「知っている人なら後からでも直ぐお前と分る。肩を振らないように歩く癖をつけないとね……」

「あ、みんなにそう云われてるんだよ。」

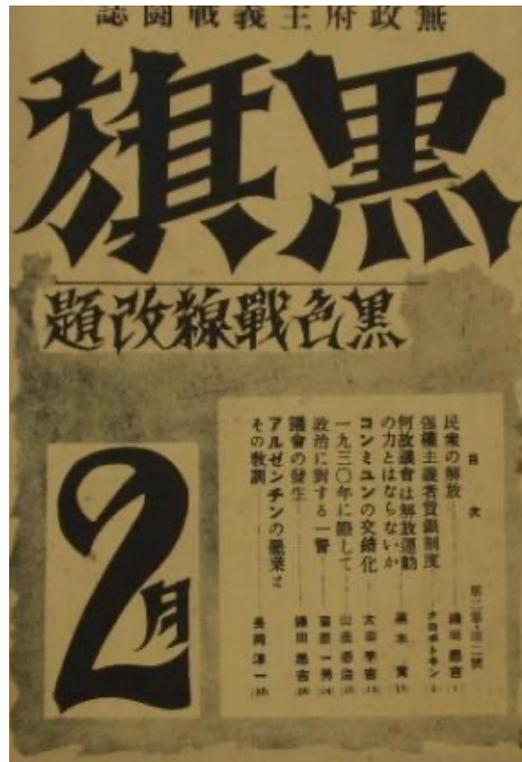
「そうだろう。直ぐ分る！」

母は別れるまで、独り言のように、何べんも「直ぐ分る」を云っていた。

私はこれで今迄に残されていた最後の個人的生活の退路——肉親との関係を断ち切ってしまった。これから何年目かに来る新しい世の中にならない限り（私たちはそのために闘っているのだが）、私は母と一緒に暮すことがないだろう。



1929



1930



1930

新感覚派

横光利一「頭ならびに腹」

『文藝時代』1924.10

- 真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で駆けてみた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された。

文藝時代 1924.10-1927.5



千葉亀雄「新感覚派の誕生」

『世紀』1924.11

- 文壇が動いてゐる。若しくは動いて居ない。
- 現実を、単なる現実として表現する一面に、ささやかな暗示と象徴によって、内部人生全面の存在と意義をわざと小さな穴からのぞかせるような、微妙な態度の芸術が発生するものも自然の約束なのである。(略) そうして彼等が、そうした芸術の傾向に、特殊な悦びを感ずるのは、彼らの心理機能が、何よりも気分や、情調や、神経や情緒やに最も強い感受性を持つからであり、そしてそれは、文化の芸術が、当然そこまでに導かるべき内部生命を持つからである。
- いわゆる「文藝時代」派の人々の持つ感覚が、今日まで表れたところの、どんなわが感覚芸術家よりも、ずっと新らしい、語彙と師とリズムの感覚に生きて居るものであることはもう議論がない。

片岡鉄兵「若き読者に訴ふ」 『文藝時代』1924・12)

もしその文章が感覚的に成功したら— 渾身の感覚が、物の「動」の状態の上に澆漑と生動したらその文章は読者の同様の感覚を、幻想されたる物の状態の上に溶合せしめずには措かない。読者の感覚は— 理想的の場合は渾身の感覚が— 作者と共に、一つの物の状態の内に、状態の底に、状態の上に、生命を得るのである。読者の事は姑く措く。斯のやうに作者の感覚が物と共に溶合して生きることは、その瞬間に第二の生活の始まる事を約束するのは云ふまでもない。

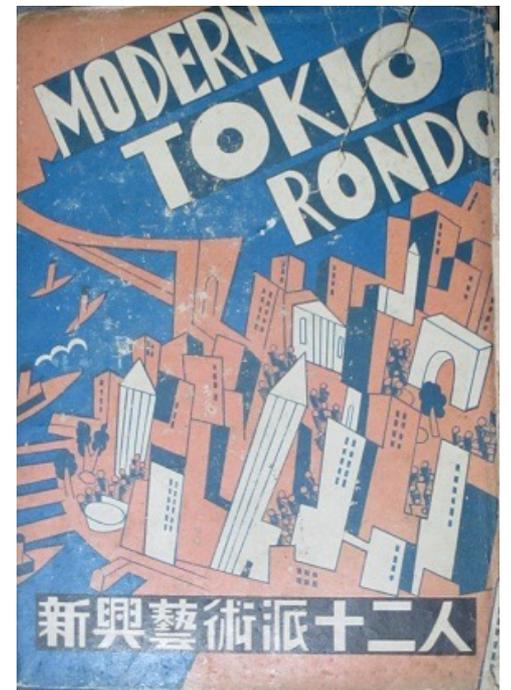
新興芸術派



1926



吉行エイスケ



1930



横光利一

エロ
グロ
ナンセンス



1930

「私」の多重化

- ドッペルゲンガー
- 見る私／見られる私
- 「鏡」というモチーフ

- →横光利一『純粹小説論』1935
- 太宰治

芥川龍之介「二つの手紙」

『黒潮』1917.9

すると、私の眼の前には、たちまち意外な光景が現れました。北向きの窓の前にある机と、その前にある輪転椅子と、そしてそれらを囲んでいる書棚とには、勿論何の変化もございません。しかし、こちらに横をむけて、その机の側に立っていた女と、輪転椅子に腰をかけていた男とは、一体誰だったでございましょう。閣下、私はこの時、第二の私と第二の私の妻とを、咫尺の間に見たのでございます。私は当時の恐しい印象を忘れようとしても、忘れる事は出来ません。私の立っている^{しせき}闕の上からは、机に向って並んでいる二人の横顔が見えました。窓から来るつめたい光をうけて、その顔は二つとも鋭い明暗を作って居ります。そして、その顔の前にある、黄いろい絹の笠をかけた電燈が、私の眼にはほとんどまっ黒に映りました。しかも、何と云う皮肉でございましょう。彼等は、私がこの奇怪な現象を記録して置いた、私の日記を読んでいるのでございます。これは机の上に開いてある本の形で、すぐにそれがわかりました。

私はこの光景を一瞥すると同時に、私自身にもわからない叫び声^{おのずか}が、自ら私の唇^つを衝いて出たような記憶がございします。また、その叫び声につれて、二人の幻影が同時に私の方を見たような記憶もございします。もし彼等が幻影でなかったなら、私はその一人たる妻からでも、当時の私の容子^{ようす}を話して貰う事が出来たでございましょう。しかし勿論それは不可能な事でございます。ただ、確かに覚えているのは、その時私がはげしい眩暈^{めまい}を感じたと云う事よりほかに、全く何もございませぬ。私はそのまま、そこに倒れて、失神してしまったのでございます。その物音に驚いて、妻が茶の間から駆けつけて来た時には、あの呪^{のろ}うべき幻影ももう消えていたのでございましょう。妻は私をその書齋へ寝かして、早速氷^{ひょうのう}嚢を額へのせてくれました。

梶井基次郎「Kの昇天」

『青空』1926.10

ところで、月光による自分の影を視凝^{みつ}めているとそのなかに生物の気配があらわれて来る。それは月光が平行光線であるため、砂に写った影が、自分の形と等しいということがあるが、しかしそんなことはわかり切った話だ。その影も短いのがいい。一尺二尺くらいのがいいと思う。そして静止している方が精神が統一^{みつ}されているが、影は少し揺れ動く方がいいのだ。自分が行ったり戻ったり立ち留^{みつ}ったりしていたのはそのためだ。雑穀屋が小豆の屑^{あずき}を盆の上で捜すように、影を揺らごらんさい。そしてそれをじーっと視凝^{みつ}めていると、そのうちに自分の姿がだんだん見えて来るのです。そうです、それは「気配」の域を越えて「見えるもの」の領分へ入って来るのです。——こうK君は申しました。そして、

「先刻あなたはシューベルトの『ドッペルゲンゲル』を口笛で吹いてはいなかったですか」

「ええ。吹いていましたよ」

と私は答えました。やはり聞こえてはいたのだ、と私は思いました。

「影と『ドッペルゲンゲル』。私はこの二つに、月夜になれば憑^{みつ}かれるんですよ。この世のものでないというような、そんなものを見たときの感じ。——その感じになじんでいると、現実の世界が全く身に合わなく思われて来るのです。だから昼間は阿片喫煙者のように倦怠^{けんたい}です」

とK君は言いました。

自分の姿が見えて来る。不思議はそればかりではない。だんだん姿があらわれて来るに随^{したが}って、影の自分は彼自身の人格を持ちはじめ、それにつれてこちらの自分はだんだん気持^{はる}が杳かになって、ある瞬間から月へ向かって、スースーッと昇って行く。それは気持で何物とも言えませんが、まあ魂とでも言うのでしょうか。それが月から射し下ろして来る光線^{さかのぼ}を溯^{さかのぼ}って、それはなんとも言えぬ気持で、昇天してゆくのです。

まとめ

- 関東大震災後の再編
- 大衆文学の勃興
- 論争の時代
- 立場や方向性の差異が剥き出しに
- 共通性：既存の体系の破壊
- 多重化してゆく自己

